

リルケの「五つの歌」について

水 沼 和 夫

Zu Rilkes »Fünf Gesänge«

KAZUO Mizunuma

Abstract

Im Zentrum dieses Aufsatzes, der als der erste Versuch von Untersuchungen über die Zusammenhänge des Dichters zu politischen Ereignissen von 1914 bis 1919 betrachtet werden sollte, stehen die »Fünf Gesänge«, die Rilke in den ersten Augusttagen 1914, d.h. fast gleich mit dem Ausbruch des ersten Weltkrieges, und zwar mitten im Kriegsbanne geschrieben hat. Was der Dichter am Enthusiasmus, der plötzlich fast alle Leute ergriffen hatte, selbst einfühlend erlernt hat, ist eine vorläufige Verwirklichungsmöglichkeit seines innen entworfenen Weltraums, die man sonst bei den Spanischen Trilogien oder Elegien besser verstehen kann, und dann ist schließlich auch ein Schreckliches, das die Leute in die Irre führen sollte. Gegen den Patriotismus überredet der Dichter im letzten Gesang, das damals eine politische Bedeutung haben könnte, die Leute zur größeren Zukunft, die er eigentlich wollte. Somit kann man an den »Fünf Gesängen« deutlich absehen, wie der Dichter seiner Zeit ernste Aufmerksamkeit gewidmet hat, wenn die Gesänge auch als Kriegsgedichte keineswegs zu behandeln sind.

はじめに

リルケの政治的な発言を集めたシュトルク (Joachim W. Storck) による書簡集: 「Rainer Maria Rilke Briefe zur Politik」がインゼルス書店から出されて以来, この〈非政治的詩人〉の政治的姿勢や現実社会への関係一般について, 「なお完全とは言えない」¹⁾にしても, より本格的な究明が可能になっている。第1次大戦直後のバイエルン革命への関与, また, 初期ムッソリーニへの賛美や革命的力としての暴力肯定論などは, 「悲歌」や「ソネット」とどう結び付きうるのか? それに答えるためには, 第一に, この詩人の現実社会への関係が整理されなければならない。例えば, W・レップマンによる評伝²⁾は, 最近のリルケ研究では最も優れた労作の一つに数えられるが, この伝記においても, シュトルクによって公にされた幾つかの注目すべき書簡, 例えば, 時の外相キールマン宛のもの³⁾やのマックス・フォン・バーデン宛のもの⁴⁾などには全く触れられていない。そこには, 依然として, リルケが実際にそうであった以上に〈非政治的な詩人〉の姿が描かれている, と言わざるを得ない。本論では, そうした欠落した側面を拾い上げながら, それを彼の作品群の脈絡のなかに取り込もうとする試みのひとつとして, 第一次世界大戦勃発とともに生まれた『五つの歌』について考察する。それは, この詩人が時代との交渉を極めて真剣に受け止めていたことを示す, 特異な作品となっている。

第1章 戦争の神

1914年8月1日、対露宣戦布告と共に独軍によるベルギー進軍が開始され、第一次世界大戦の火蓋が切られた。この直前まで、ベルギーの海岸で休暇を過ごしていた St・ツヴァイクは、悪化するばかりの事態の推移にも拘わらず「苦労も知らぬ気な気分」に浸っていた。——「考えられるあらゆる国民が、平和に群れ集っていて、特にドイツ語が多く話されるのが聞かれた。例年のように近くのラインラントから、夏の休暇客たちが彼らの最も好むベルギー海岸に送られてきていたからだ」——彼は、戦争になったら国際条約にも拘わらずドイツ軍がベルギーに突入してくるだろう、というベルギー人の友人の悲観的な憶測に「万一なにかことが起こるとして、フランスとドイツが互いに最後の一兵まで相打つときでも、君たちベルギー人はのほほんと落ちついておれますよ」と一蹴することが出来た。それは、しかし、決定的な紛争を抑止する力がどこかで働くに違いない、ましてや、国際的に承認された中立国家が闇雲に侵略されるなどということは起こり得ない、という一般的期待を抱きうる最後の時となる。『世紀末のヨーロッパ』⁵⁾ で B・W・タックマンが指摘しているように、第一次世界大戦前のヨーロッパは、それを懐かしむ人々が言うほどに、その真直中においては輝かしくもなければ、平和と精神的な安定のなかに憩っていたわけでもないだろう。ただし、20世紀の加速度的な工業化を背景としたこの最初の世界戦争は、単に西ヨーロッパが半世紀ぶりに体験する戦争だったばかりでなく、人類未曾有の悲惨を生みだし「信仰を破壊し、思想を変化させ、癒しがたい幻滅の傷」を残す結果になるのであり、その意味では、第一次世界大戦前のヨーロッパにおいては「人々は今日よりも、諸々の価値や基準をもっと確信していたし、人類にもっと希望をつないでいた」⁶⁾ という側面もまた時代社会の特徴として再確認され得るのである。ツヴァイクが開戦の二日前までベルギーに留まっていたという事実は、その客観的裏付けともなり得る。〈七月危機〉のなかで、日増しに緊張が高まっていたにもかかわらず、「あれもこれも最後の瞬間に何とか片がつくはずだ」という根強い信仰⁷⁾ が広まっていたのである。

リルケが、ドイツ旅行のためにパリを後にしたのは、オーストリアがセルビアに最後通牒を突きつける(7月23日)以前の7月19日のことであり、彼の旅立ちを、幾分たりとも国際情勢の変化に関連させて考えることは出来ない。旅の主な目的は、悪化していた心身の不調についてミュンヘンの医師シュタウフェンベルクの治療を受けることにあった。彼は2カ月分の着替えを用意し、カンパーニュ＝ブルミエール街の住居を後にする。パリからゲッティンゲンに向かい、その日のうちにルー・アンドレアス・ザロメとの10ヶ月振りの再会を果たしている。ゲッティンゲンに滞在したのはほんの数日であるが、それは当初からの計画で、ルーとは、8月1日か2日にミュンヘンでもう一度合流する約束が出来ていた。7月23日からはライプツィヒでキッペンベルク家の客となる。この時、リルケは、フライブルク大学で学ぶ計画を立てているが、その理由のひとつは、フライブルクが「パリから遠くない」⁸⁾ というものであった。そして、1週間後の8月1日、まさにライプツィヒを後にしようとしていた時に、彼は開戦を知るのである。既にミュンヘンに着いていたルーは、「彼はもう旅に出ることはできないだろう」⁹⁾ と考え、再会を放棄してゲッティンゲンに帰ってしまうのだが、リルケの方はそのまま列車に乗ってミュンヘンに向かう。そして、ミュンヘン到着に続く8月2日と3日に『五つの歌』が書かれる。この連作は、第一次大戦開戦に伴った国民的熱狂を背景としており、その数日間に彼が見聞し得たであろう、ライプツィヒやミュンヘンの街頭、駅周辺や車内の情景などが、この詩人にとっても極めて大きな衝撃だったことを示している。事実、そうした情景の幾つかは、第1の詩に、部分的に反映されている。注目されるのは、そうした個々の体験

の総体が、リルケにおいてはひとつの神的な体験に結びつけられていることである。その最初の詩は、詩人の眼前に突如として立ち現れた〈戦争の神〉への驚きと畏敬の念を、深い感嘆の調子で歌っている。

五つの歌

1914年 夏

I

初めて 私は見ている おまえの立ち上がるのを
 耳にはしていたが 限りなく遙かな 信じ難い 戦争の神よ。
 平和の果実と果実の間に 何と濃密に 撒かれていたことだろう
 恐るべき行為の種子が。それが突如として成長したのだ。
 昨日はまだ小さく 養分を必要とした。
 それがいまでは 背丈もの高さで立っている：明日には
 人をも越えるだろう。この灼熱の神が
 一なる神とともに 根を張る国民から
 その作物を奪い去り そして 収穫を始める。
 畑地は人間のように立ち昇り 人間の雷雲となる。
 夏は追い越されて 田園の光景に取り残される。
 子供たち 遊んでいる者たちは 老人たち 物思う者たちは
 そして 信頼を寄せている女たちは 留まる。花盛りの菩提樹の
 心を揺する香りが 共同の別れに染み込んでゆく。
 そして 何年かの後にも この香り この満たされた香りを呼吸することは
 その意味を保つだろう。
 婚約者たちが選ばれた者のように歩んでゆく。一者が彼らをと定めたのではなく
 全国民に彼らを感じるようにとしむけたかのようだ。少年たちの
 ゆっくりと見定めようとする眼差しが ひとりの若者を捉える。
 彼はいつそう大胆な未来へと入って行くのだ。いましがたまで 百もの声を聞き
 どれが正しいのかもわからずにいたこの青年に いまや 一つになった呼びかけが
 どんなにか安らぎを与えていることだろう。と言うのも
 この喜ばしい 確実な苦難に際し 勝手気ままとは何であろうか？
 ついにひとりの神が。 私たちが平和の神を幾度となく取り逃がしたので
 突如として 戦闘の神が 私たちを捕らえ 炎を投げつけるのだ。
 そして 故郷でいっぱい心の心の上で 叫んでいるのは
 その神が雷鳴を轟かせながら住んでいる あの赤みを帯びた空だ。¹⁰⁾

印象深いのは、突然現れた〈戦争の神〉への大きな驚きとその神に帰依しようとする感情である。しかし、この最初の詩は、特に前半の部分で難解な表現が連なっており、必ずしも明解であるとはいえない。その部分について、より詳細な解釈を試みてみたい。

初めて 私は見ている おまえの立ち上がるのを

耳にはしていたが 限りなく遙かな 信じ難い 戦争の神よ。

「私」(＝詩人自身)は、戦争の神が立ちあがる様を、見る者として感じている。それは、人の口に登っているのを聞いても、「信じ難い」と思われていた、極めて遠い神々の一人である。この「極めて遠い」については、第2の詩における「太古の精神」「父祖たちの感情」「英雄たちの山脈」などから、時間的に、つまり、〈限りなく遙かな昔の〉と解し得るのであろう。第3の詩でも「早期の どうか思い当たるだけの神々のひとりとして 遙かに望みながら 賛嘆し 信じていた神」と歌われている。

平和の果実と果実の間に 何と濃密に 撒かれていたことだろう
恐るべき行為の種子が それが突如として成長したのだ。

「私」が、その神が立ち上がったのだと感じているのは、突如として成長した恐るべき行為のためだ。平和の年月の間にも、その種は幾重にも植え込まれていたのだろう。以下で明らかになるように、その種を撒いたのは、戦争の神であり、その種子が植え込まれたのは、国民(Volk)の内面である。そして、そこから「突如として」「恐るべき行為」が成長してきたのである。

昨日はまだ小さく 養分を必要とした
それが 既に 背丈もの高さで立っている：明日には
人をも越えるだろう。

この恐るべき行為の成長こそ、「私」に戦争の神の到来を如実に証明して見せているものののだが、それは、つい先日までは、人間によって養分を与えられなければならない些細なものに過ぎなかった。が、いまは、人間と同等となり、人間以上のものになろうとしている。人間は、もはや、この突如として強大となった恐るべき行為を、制御し得ないであろう。それは、超人間的なものとなるのだ。

この灼熱の神が
一なる神とともに 根を張る国民から
その作物を奪い去り そして 収穫を始める。
畑地は人間のように立ち昇り 人間の雷雲となる。

この戦争の神が、いま赤々と熱して、一なる神¹¹⁾と手を携え、国民(Volk)から、その作物、即ち、突如として成長した恐るべき行為を奪い取り、収穫を始める。畑地から水蒸気のように次々と立ち昇り、雷雲を形造っているものがあるが、それは、人間が姿を変えて蒸発しているようであり、その雷雲は人間の戦いの声(Menschengewitter)を轟かせているようなのである。これが戦いの神の収穫の仕方である。つまり、この戦争の神が恐るべき行為の種を、平和の時代の実りに混せて、人間の内部に植え込んでおき、人間に養わせておいたのだ。この恐るべき行為は、人間自身の中で成長してきたものであり、神によるものであると同時に人間的なものでもある。そして、この立ち昇って行く「恐るべき行為」によって、いま、天と地とがひとつに連なろうとしているのであり、人間

と神々との歴史における劇的な一場面が生じつつあるのだ。つまり、この上昇する「その作物」即ち「恐るべき行為」は「人間のよう=menschlich」ではあっても、人間そのものではなく、それを育てた「国民=Volk」はこの地上に「根を張って=wurzernd」いるのである。ここに生じているのは、後に明らかにされるように、ひとつの「変容=Verwandlung」である。

これに続く「夏は追い越され 田園の光景に留まり続ける」では、人間が収穫される時を迎え、そのような変容を遂げつつある一方で、自然は依然として夏の盛りであること、未だ収穫の季節ではないことが、即ち、人間界の突然の熱気と自然の平静が対照的に歌われている。そして、その対照は続く詩行で、戦場に赴く者と故郷に留まる者との関係に置き換えられ、「共同の別れ」が歌われる。出征兵士を送り出す情景である。それは、家族との別れであれ、恋人との別れであれ、もはや個々の別れなのではなく、ただひとつの「共同の別れ」なのである。詩人は、駅や街頭の到る所でそうした場面に出くわしたであろう。そして、教会では、幾つもの、それと分かる、繰り上げて行なわれた、或は即席で挙行された婚礼にも出会ったことであろう。その婚姻の誓いと祝福さえもが、もはや、個々のものではなく、国民的なものとなっているかのようなのである。人々はいま、それほどひとつになっている。日々の生活の中で戦わされてきた議論や人々の間の対立は、突如として戦争の神が出現し日常が停止すると同時に止揚され、「一つとなった呼びかけ」のもとに「いっそう大胆な未来」の扉が開かれようとしている。詩人は、それに伴うであろう「確実な苦難」を思いながらも、いまや訪れようとしている収穫の時を確信し、それを「喜ばしい」と感じ、個々人の「勝手気まま」(Willkür)を排除する。また、それ故に、「共同の別れに染み込んで行く」花盛りの菩提樹の香を、「満たされた香り」として、「1914年、夏」の記憶に留めようとするのである。

この第1の詩は、最後の二詩行でもう一度「戦闘の神=Schlacht-Gott」の到来を確認し、祖国愛とこの神との間に、ひとつの象徴的な関係を暗示して終わっている。

そして 故郷でいっぱい心の心で 叫んでいるのは
その神が雷鳴を轟かせながら住んでいる あの赤味を帯びた空だ。

特徴的なのは、この2詩行において、祖国愛:「故郷でいっぱい心の心」と「戦闘の神」とは決して同一のものではなく、むしろ、それらが対置されているように見える、という点である。「赤味を帯びた空」は、戦争の神の住処であり、そこでは神的でもあれば人間的でもある刈り取られたものが雷鳴を轟かせているのだろう。それに反して、「故郷でいっぱい心の心」は、刈り取られたものとして天上へと立ち昇るのではなく、地上に留まっているのだ。このような対置の仕方は、最終の第5の詩におけるほど明確ではないにしても、遍歴の詩人リルケの、愛国者としての限界を表している。「根っからの平和主義者」シュテファン・ツヴァイクですら、開戦当初においては、即刻志願兵となって戦場に向かったデーメルを「真の英雄」と日記のなかで讃えているが、それはデーメルが「フランス戦線へではなく、ロシア戦線へ」¹²⁾と志願したからであった。しかし、リルケにとっては、フランスもロシアも同様に切り離し難い彼自身の一部である。「戦争の神」のもとで燃え立っている〈愛国心〉を、そのまま神的な事象とすることは、自己否定につながる。この対置には、そうした意識が働いているであろう。

また、「戦争の神」自体が既に副次的要素を伴っている。即ち、この神の傍らには「一なる神: Einer」がいなければならないし、また、「私たちが平和の神を幾度となく取り逃した……」などと歌われているように、「いっそう大胆な未来」への移行は、それが可能であるならば、「平和の神」の出現に

よっても達せられ得るもの、と見ることができるのである。彼が希求するのは、ある神的な状況であって、「戦争の神」もまた、それをもたらさない限り二次的なものに過ぎない。

第2章 開戦時の熱狂と陶醉

開戦時の国民的熱狂に神聖なものを感じたのは、リルケだけではなかった。ヴィーンでそれを体験した St・ツヴァイクの回想は、あたかもリルケの詩行を詳細に解説するかのようである。

「真実を重んじるために、私は告白しなければならないが、この最初の群衆の出発には、なにか堂々たるもの、感動的なもの、そして、魅惑的なものさえ含まれていて、それからのがれるのは困難であった。そして、戦争に対するあらゆる憎しみと嫌悪にも拘わらず、この最初の頃の思い出を、私は自分の生涯において見失いたくはない。これまでにないくらい幾千、幾十万の人々は、平和の時においてもっと感じていなければならなかったこと、すなわち彼らは一であるということを感じたのであった。二百万の一つの町、ほとんど五千万の一つの国は、自分たちは世界史を、けっして二度とはめぐってこない瞬間を、相ともに体験しているのだということ、各人はその微少な自我をこの燃え立っている群衆のなかに投じ、そこであらゆる利己心から自分の身を浄化するよう呼びかけられているのだということを、このときにあって感じたのであった。身分や言語や階級や宗教のあらゆる区別は、この一瞬の間は、友愛の奔流のような感情に被い吞まれてしまった。見知らぬ人々も街頭で言葉を交わし、多年相避けていた人々も互いに手を握り合い、到る処に生氣あふれる顔が見られた。各人がその自我の高揚を体験し、彼はもはや以前の孤立した人間ではなく、彼は群衆の中に加わったのであり、彼は民族であり、それまで眼中におかれなかった彼の人格は、ひとつの意味を獲得したのであった。それまで早朝から夜分まで手紙を分類し、いつも分類し続け、月曜から土曜まで普段に分類し続けていた微々たる郵便局員、また秘書、靴屋が、突然別なロマンティックな可能性を、その人生に持つようになった。彼は英雄になることができたのであり、早くも女たちは軍服を着たあらゆる人を賛美し、銃後に残る者たちはあらかじめ畏敬を含めて、この英雄というロマンティックな名前であて送るのであった。かれらは自分たちを日常の平凡さから抜け出させる未知の力を認めた。」¹³⁾

ここでツヴァイクが言っているのは、共同性と一体感、それに伴う利己主義の消滅、また、それが自我の消滅ではなく高揚であること、英雄という名のもとでの突然の平等感等々である。ツヴァイクはこれらを前に「感動」を覚えた、と告白している。また、ツヴァイクの回想ほど網羅的ではないにしても、やはり、開戦に際してフランスから「数日がかりの拷問」を経験してミュンヘンにたどり着いたルー・アラベール・ラザールも、ライン平原をベルギーに向けて進軍して行く兵士たちに「不思議な輝き」「息詰まるような何か偉大なもの」の光景を見ている¹⁴⁾。それは、リルケの言う「恐るべき行為」に向かおうとする者の持つ神聖さである。ただ、これら二つの証言が、ともにこの大戦の悲惨や野蛮のすべてを経験した後になされたものであるのに反して、リルケの『五つの歌』はその体験の最中にある。『五つの歌』をひとつの連作として生み出したものは、熱狂と陶醉の只中における〈神的な体験〉の実感である。

また、開戦時の熱狂を理解する上では、「生活はすっかり網の目に巻き込まれ、身動きできなくなっている。……どのようにしてこんな状態になったにせよ、この状態が現にあり、誰もそれから逃れることができない」¹⁵⁾ (フーゴー・バル) という、当時の人々の戦前における閉塞感も見逃すことはできないだろう。独仏の恒久的な冷戦状態や独英の戦艦建設競争といった外交上の諸問題に加え

て、国内的には社会民主党の大躍進に見られるように、指導者層は追いつめられ、帝政を軸とした旧体制は大きな危機に瀕していた。ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラーは、『ドイツ帝国 1871-1918』¹⁶⁾の中で、そうした指導層による、内政を最優先とした冒険的決断を「前方への逃避」と呼んでいる。彼の歴史家としての見解は、「ドイツ政治の本来のジレンマ」は、ドイツ社会の進展において共に随伴すべき「経済的近代化の進展」と「社会諸関係や政治の近代化」の自然な相互作用を押さえ込もうとし、しかも、「あまりにも成功しすぎて、ひどい結果をもたらした」¹⁷⁾ビスマルクの時代に起因する、というものである。「平和の果実と果実の間に何と濃密に恐るべき行為の種子が撒かれていたことだろう 恐るべき行為の種子が」というリルケの詩句にも、平和のなかで悪戯に引き延ばされた総決算を、進んで迎え入れようという意識が読み取れなくもない。左翼的演劇作家バルが、開戦間もなく、当時の多くの文士たちと同様、志願兵として届け出ているように、「前方への逃避」は、差し当たりは、左右の別なく、大歓迎されたのである。

第III章 太古の風、自我、世界

「陶然とした人々を見ることは 私の幸い」で始まる第2の詩においては、〈神〉に対する直接的な呼びかけは中断され、「恋人たち」「母たち」「娘たち」への語りかけが全体を構成している。

II

陶然とした人々を見るのは 私の幸い。
 演劇は とうに私たちには真実でなく
 考案された画像は 私たちに 決然と語りかけるのではなかった。
 恋する者たちよ いまや見る者のように 時代を語るがいい
 盲目に 太古の精神から。
 聞け 君達はまだ聞いたことがなかったのだ。いま 君たちは木々であり
 その間を 暴力的な風がますます音を高めて吹き抜けて行く。
 平たんな歳月の彼方から暴力的な風が吹き寄せる
 父祖たちの感情から 崇高なる行為から 影高き英雄たちの山脈から。
 その山脈が 君たちの喜ばしい栄誉の新雪に包まれて
 より純粹に より親密に照り輝くのも 間もなくだろう。
 いま 生きた風景が どんなに変容しつつあることか……¹⁸⁾

「太古の精神から」に続く数詩行に底流として流れているのは、太古から綿々として連なる人間の戦いの歴史を神聖なものと見なし、いままた、それに参入することで偉大なる古代の英雄達の序列に加わり、言わば、全的関連の世界に踏み入ろう、とする意識である。「恋する者たち」は〈真実ではない演劇〉や〈決然と訴えかけて来るのではない考案された絵画〉に囲まれた日常を起点としている。しかしいま、太古から吹き寄せる風に耳を傾け、彼らもまた、太古の英雄たちの山脈に「より純粹により親密に照り輝く」新たな一段階を画そうとしているのだ。そして、その媒介となるのは「崇高なる行為」即ち、第1の詩の「恐るべき行為」であり、暴力的な風に聞き入る木々たちの〈変容〉である。それはまた、第3、第4の詩が明示しているように、「死」の要求でもある。この法外な要求は、前年に書かれた「第6の悲歌」の〈英雄の章〉以来のもので、詩人の言う〈世界空間〉

に踏み入ることの、象徴的な意味での条件と見なしうるものだ。

不思議なほど 英雄は早死の者たちに近い。命長らえることに
彼はとらわれない。¹⁹⁾

それは、英雄たちが「行為への衝動に」²⁰⁾ いわば「陶然と」捉えられているからだ。「悲歌」の英雄と同様、詩人の目の前で、〈命長らえることにとらわれない〉兵士たちが「ただ一つの呼び掛け」に従い、神々しさに包まれながら戦場へと赴くのである。彼らはいま、「海の歌」²¹⁾において、「太古からの息吹」に身を委ねるあの「無花果」の木のように、超時間的な、純粹持続の世界を受け入れようとしているかのようである。それは、「生きた風景」の「変容」である。「恐るべき行為」を胸に秘めた兵士たちの神聖な輝きと突如として生じた共同への一体化は、カプリ島の夜の頂で太古からの風を「耐える」ようにしていた嘗ての詩人を、明らかに乗り越えてしまっている。3節構成の第3の詩では、不安や疑いと交差する形をとりながら、そのことが繰り返し歌われている。即ち、その第1詩節の結び、及び、第3詩節の、つまりこの詩全体の結びの部分である。:

……そして、私たちは？ 白熱し一つのものとなるのだ。
彼が致死の生気を吹き込んだ ひとつの新たな被造物へと。
だから 私とて もはや在りはしない。共同の心臓から
私の心臓が脈打ち そして 共同の口が
私の口を打ち開く。
……

私たちは別の者たち。同一へと変身した者たちだ：誰もの
いまや突如として自分のものではなくなった胸の中へと
ひとつの心が 流星のように 飛び込んだのだ。
熱い 鉄の宇宙からなる ひとつの 鉄の心が。²²⁾

これらの引用箇所は、嘗ての『スペイン三部曲Ⅰ』²³⁾で、〈総てのものら〉と「私から」なる「ただ一つのもの」が要求されながら、まさに「私」(Ich)の在り続けるべきことが同時に求められたのとは、次元を異にしている。『五つの歌』では、詩人は「私とて もはや在りはしない」としているのである。つまり、詩人は『スペイン三部曲Ⅰ』で抜き差しならぬ対立を生み出した〈世界〉と〈自我〉との関係の、調和のイメージを、彼の眼前に繰り広げられている人々の一体化に重ね合わせようとしているのである。ここで「宇宙的で地上的な流星」(『スペイン三部曲Ⅰ』)がもう一度想起されているのも偶然ではない。その重ね合わせからは、個々の存在がありながら全体として一つを成しており、一つであるからこそ個々が満たされた形象であり得る、というイメージが生じている。この変容は、第4の詩の冒頭でも、

IV

私たちの嘗ての心は 君たち友人たちよ 誰が予感しているだろう
昨日ならまだ私たちを動かしていた 馴染みあるあの心は
二度と戻らぬものだ。誰も

引き返して感じることは出来ない。誰も
なおも存在する者ではありえない この崇高なる変容の後では。²⁴⁾

と、歌われている。第3の詩の「彼が致死の生気を吹き込んだ」からも明らかなように、「崇高なる変容」には、「死」へと向かう「恐るべき行為」「崇高なる行為」が伴われなければならない、それ故に「讃え」られるべきなのである。

なし遂げるがいい この暴力的な心を 使い果たすのだ！
讃えながら：何故と言って いつの世も 賛嘆に値するのは
個々の懸念の慎重さではなく ひとつの 敢行する精神による
厳かに感受された危険のなかの 神聖な共同 だったのだから。同じ気高さで
戦場の生が 無数の男たちの内部に立つ。そして 誰の胸の中でも
その真っ直中 君主となった死が 最も危険な場所を目指して進む。²⁵⁾

第4章 不協和音

開戦時の熱狂と陶醉の総体に〈神〉の名を冠したことは、リルケが受けた衝撃と感動の大きさを示しているが、第1の詩の「信じ難い」が既に暗示しているように、取り違いをしているのではないか、という不安がないわけではなく、それはこの連作の展開のなかで徐々に強められて表現される。そして、熱狂と陶醉は暗澹たる運命を前に、むしろ絶望的な真剣さへと転じて行く。最初の不協和音は、第3の詩の冒頭で、次のように響き始める。

この三日間というもの これは何か？ 私は本当にこの恐るべきものを歌っているのか？
私が歌っているのは本当に 早期の どうにか思い当たるだけの神々のひとりとして
遙かにのぞみながら 賛嘆し 信じていた あの神なのか？²⁶⁾

こうした疑いにも拘わらず、続く詩行では「彼によって致死の生気を」吹き込まれた人々を前に、詩人は〈戦争の神〉が立ち上がったことを確認する。しかし、調子は更に反転して、詩人の内面から「問いかけるもの」が依然として疑問の唸りをあげる。

それでも 夜には 船のサイレンのように 唸りをあげるものがある。
私の内で問いかけるものが 唸りをあげるのだ 道を 道を求めて。
天上では この神には道が見えているのか 高々としたあの肩越しに？
彼は灯台として 私たちを長らく探し求めていた戦う未来へと指し示しながら
炎をあげているのか？ 彼は 知る者なのか？ 彼は

知る者であり得るだろうか？ この引きさらって行く神は。²⁷⁾

こうして、3節で構成されている第3の詩では、疑念や不安が高められ、それに伴って、〈共同の心臓から私の心臓が脈打つ〉という神的状況への信頼の念もまた一層その声を高めるのである。この対立は、先に触れた「熱い 鉄の宇宙からなる ひとつの 鉄の心」が獲得されているという結びの部分での確信によって、ようやく安定点に達している。その確信は、続く第4の詩の冒頭における「この崇高なる変容」の確認へと受け継がれるが、その結びの部分では、もう一度希望の少なさが強調され、行為者への過大と思われる要求が示される。

おお 友らよ 苦痛をも讃えるがいい。
泣き言を言わずに 私たちが未来の者ではなく
いまだ あらゆる過去の者たちにより血縁であったこと
その苦痛を讃えるのだ：それを讃え そして 嘆くがいい。
君たちにとって その嘆きが恥辱とならぬよう。 嘆くがいい。やがて
この見分けのつかない 誰にも捉え難い運命が 真実となるだろう。
君たちが 止めどなく嘆き しかも この最も嘆かわしい運命を
止めどなく見つめる時：待望の運命を果たすように果たす時。²⁸⁾

「苦痛」をも讃えながら、「この最も嘆かわしい運命を止めどなく見つめ」「待望の運命を果たすように」果たすことが要求される。それは第2の詩の「陰高き英雄たちの山脈」に続く「その山脈が君たちの喜ばしい栄誉の新雪に包まれて より純粹に より親密に照り輝くのも 間もなくだろう」の持つ祝祭的な感情とは別ものである。詩人は「この見分け難い運命」を自覚し、祖父たちの戦いの歴史を乗り越える必要を感じている。過去の繰り返しは、真に新たな未来を開くことにはならない。祖父たちとの血縁は、いまや、苦痛として受けとめられるべきものとなる。それは太古に連なる〈戦争の神〉の拒否にも等しい。過去の者たちとの血縁を苦痛としてのみ受けとめる行為者は、いわば孤独に、未曾有の運命に曝されている。「過去の者たちにより血縁」の者であることの苦痛は、第5の詩で、この神への不服従、祖父たちの血の克服、という要求に転じ、それによって、この最後の詩は、もはや「戦争詩」として歌われ得るものではなくなるのである。

V

立て この恐るべき神を 畏怖するのだ！ 彼を動転させろ。
昔 戦う悦びが 彼を甘やかせた。いま 苦痛が君たちに押し寄せるがいい。
新たな 驚嘆の 戦う苦痛が
彼の怒りに先んじて 君たちに押し寄せてくるがいい。
たとえ 血が 天界の父祖から伝わるひとつの血が
君たちを征服するときにも：その心根は依然として君たちのものであれ。
過去のもの 嘗てのものに習わぬこと。君たちが
苦痛でないかどうかを 試すがいい。行為する苦痛よ。苦痛にも
その歓喜があるのだ。おお そしていま 君たちの上に

旗が捧げられる 敵陣から吹き寄せる風の中で！
 何の旗だ？ 苦痛の。苦痛の旗だ。
 重々しくはためく苦痛の布。 君たちの誰もが
 汗を滴らせ その苦痛に火照る顔をそれで拭った。
 そこには 君たちすべての顔が集まり 表情となっている。
 恐らくは 未来の表情か。そこに 憎しみが いつまでも
 留まることのないように。憎しみではなく 驚ろき
 憎しみではなく 決意された苦痛 そして
 取り巻く盲目の民らが 突如として君たちの理解を妨げたことへの
 厳かなる怒り；
 彼らは 君たちが 真摯に 大気と鉾山からのように
 呼吸と大地とを 採取したのは 彼らからなのだ。
 何故なら 理解することを 学ぶことを そして 多くのものを
 心の内に大切にしておくことが 外国のものも含めて
 君たちにとって 感受された使命であったのだから。
 いま 君たちは 再び 自らのものだけに制限されている。 だが
 それは より偉大になっているのだ。 世界では はるかに ないにせよ
 世界のように受け取るがいい！ そして それを鏡のように使うがいい。
 太陽を捉えながら 自らの内の迷える者たちに向けて
 その太陽を差し向けるのだ。(君たち自らの迷いは
 苦痛と驚愕の心の中で 燃え尽きるがいい)²⁹⁾

ここでも「苦痛を受けとめる決意」が要求されており、その意味では「苦痛をも讃えるがいい」という第4の詩に結びつき得るが、この第5の詩においては、それを行う者への共感が著しく後退している。それは、敵国に対する憎悪を排除し、しかも、理由を挙げて説得するとき(この部分は、当時において極めて政治的な意味を持ち得たであろう)、詩人が「陶然とした人々」の共感を得られないのと表裏の関係にある。詩人は、明らかに全体の熱狂から退いている。第1の詩で、「ただひとつになった呼びかけ」に応え安んじて戦場へと向かう若者は、ここでは自らの内に「迷い」を抱えた者となっている。「迷い」は、人々が「戦う悦び」に導かれているのではないか、という疑いを示している。敵が「盲目の民」であるように、詩人が直接呼びかけている「君ら」もまた、この恐るべき神に捉えられて、祖父たちの血に習い、敵国民への憎悪を口にし、新たな未来を切り開くとは思えない野蛮さを覗かせている。敵味方に区切られた世界は、それぞれの内側で統一的共同を生み出したにしても、もはや世界ではない。希望があるとすれば、「戦う悦び」に導かれるのではなく、「戦う苦痛」と一体化してそれを味わい尽くすことだけであり、それによって、内なる迷いが焼き尽くされ得るのであり、彼らの勝利は、苦痛の勝利(「苦痛の旗」)としてのみ可能なのである。

おわりに

こうして、熱狂と陶醉への共感によって始められた『五つの歌』は、詩人がその熱狂にも拘わらず自己(Ich)の信念に執着することによって、殊に、敵国への憎悪を批判し、敵国文化の価値を確

認することによって、それが開戦時の熱狂の只中から生まれたものであるにも拘わらず、「戦争詩」とは称し得ないものとして終わっている。それは、決して、直接的にこの戦争に対するリルケ自身の幻滅や失望に結びつくものではない。本当の幻滅がやってくるのは、もっと後のことである。8月6日のリルケは、何らかの形で共同への参加を希望しているし³⁰⁾、「突然の真剣な共同」の傍らにおける孤独を嘆いている³¹⁾のも、同じ意識からである。その意味で、ライナー・マリーア・リルケという詩人は、決して〈高踏的〉な詩人ではない。彼は、むしろ、プラーク時代における『家神への捧げもの』の親チェック的色彩や『ヴェークヴァルテン』³²⁾の試みが示すように、常に共同性と一体感を希求してきた。そして、この観点から『五つの歌』を検討するとき、彼が内面的世界として追い求めてきた、また、その後も追い求めることになるものの実現の可能性を、たとえ一瞬とは言え、開戦時の陶醉と熱狂に伴われた一体感に読み取ろうとしていたことが窺われる。これは、「悲歌」完成の途上にあった詩人が、当時の段階でどのような構想を抱いていたかを示すものとして、極めて興味深いものである。それは、「未来の空間におけるあの傾斜の感覚を束の間のものから学びとる」³³⁾ことだった。

第1次大戦開戦時の憑かれたような熱狂の傍らにあって、それに反するであろう自らの立場を敢えて主張する姿勢には、世界に対する剥き出しの真剣さがある。また、「たとえ血が天界の父祖から伝わるひとつの血が君たちを征服するときにも：その心根は依然として君たちのものであれ。過去のもの 嘗てのものに習わぬこと」と呼びかけるとき、詩人は人類がそれまでに積み上げてきたものに信頼を寄せ、未来に希望を繋いでいる。こうしたことの総ては、詩人リルケの時代社会に対する深い関心を示している。歴史的事件を前に、リルケもまた〈時代を呼吸する〉³⁴⁾のであり、それ故にこそ、幻滅や失望も可能となるのだ。その点を見逃してはならない。

注 解

- 1) Rainer Maria Rilke: Briefe zur Politik: hrsg.v.Joachim W. Storck; Insel, Frankfurt/M. u. Leipzig, 1992, S. 501.
- 2) Rilke, sein Leben, seine Welt, sein Werk: Wolfgang Leppmann; Scherz, Bern u. München, 1981.
- 3) J.W. Storck, a.a.O., S. 172ff.
- 4) J.W. Storck, a.a.O., S. 224f.
- 5) シュテファン・ツヴァイク:「昨日の世界」(ツヴァイク全集 19) みすず書房, 1973; 原田義人訳 S. 324.
- 6) バーバラ・W・タックマン:「世紀末のヨーロッパ」筑摩書房, 1990; 大島かおり訳 S. 3f.
- 7) ヴォルター・ラカー:「ドイツ青年運動」人文書院, 1985; 西村稔訳 S. 115.
- 8) Rainer Maria Rilke/Lou Andress-Salomé: Briefwechsel: hrsg. v. Ernst Pfeiffer: Insel, Frankfurt/M, 1975, S. 352f.
- 9) a.a.O., S. 351.
- 10) Rainer Maria Rilke: Sämtliche Werke (WA 1-12), Frankfurt/M. 1976; 3, S. 86f.
- 11) 「一なる神」「一なる者」: Einer は、「マルテの手記」の結びにおける〈Es war jetzt furchtbar schwer zu lieben, und er fühlte, daß nur Einer dazu imstande sei. Der aber wollte noch nicht.〉以来のもので、神であると同時に、自我をも包含したひとつの宇宙的存在を想起させる。
- 12) Stefan Zweig: Gesammelte Werke in Einzelbänden, Tagebücher; S. Fischer, Frankfurt/M. 1984, S. 85f.「8月7日……デームルが対ロシアの志願兵として届け出た、という知らせに感動。……対フランスではなく。ここには、真にヒロイズムの見本がある」
- 13) シュテファン・ツヴァイク:「昨日の世界」, S. 329f.
- 14) Lou Albert-Lasard: Wege mit Rilke; Fischer Taschenbuch, Frankfurt/M. 1985, S. 22.
- 15) フーゴ・バル:「時代からの逃走」みすず書房, 1975; 土肥美夫, 近藤公一訳 S. 6.
- 16) ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラー:「ドイツ帝国 1871-1918」未来社, 大野英二, 肥前栄一訳, 1983.

- 17) a.a.O., S. 29.
- 18) WA-3, S. 87.
- 19) WA-2, S. 706f.
- 20) a.a.O., S. 706.
- 21) WA-2, S. 600.
- 22) WA-3, S. 89f.
- 23) a.a.O., S. 43f.
- 24) a.a.O., S. 90.
- 25) a.a.O., S. 90.
- 26) a.a.O., S. 88.
- 27) a.a.O., S. 89,
- 28) a.a.O., S. 90f.
- 29) a.a.O., S. 91f.
- 30) Rainer Maria Rilke/Marie von Thurn und Taxis: Briefwechsel (I-II): Insel, Frankfurt/M. 1986; I, S. 389.
「私は目下のところ計画通りミュンヘンで医者の治療を受けているわけですが、自分勝手な生き方は今日においては全く不正なことであります。貴方は何か私のための職務を、私が書記か衛生補助要員として、でなければ、私が自分を自分の能力にしたがって一般的に役立て得るような職務を御存知ないでしょうか？ 当面は、こちらでそうしたものを見つけられるよう希望してはいますが、将来は当然オーストリアが私の任地となるでしょう。書記の仕事が勿論私には一番馴染めるのかも知れませんが、助言を頂きたいと思います」(1914年8月6日付)
- 31) Rainer Maria Rilke: Briefe zur Politik, S. 88.
「一人でいることそして一人で感じることは、突然に生じた極めて真剣な共同性というこの周辺状況では、何か氷のような冷たさを帯びております」(1914年8月28日付, ジドニー・ナートヘルニー・フォン・ボルレーティン宛)
- 32) 「ボヘミアの中に〈その強靱な根を〉降ろしている」ものとして、1896年に出された「家神への捧げもの」には、プラークの風物を歌った多くの作品のほか、当時20歳のリルケの親チェック的姿勢を証明する「ユリウス・ゼイエルに宛て」「カイェタン・ティール」などが含まれている。また、「ヴェークヴァルテン」は貧しい人々のためにと無料で配られ、「民衆の心の中でより高められた生」となることを希望として表明している。
- 33) WA-3, S. 94.
- 34) Rainer Maria Rilke: Briefe zur Politik; S. 88.